
魔法少女リリカルなのはBirth・day

ダメンズX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはBirth・day

【Nコード】

N5542U

【作者名】

ダメンズX

【あらすじ】

女神様の部下のせいで死んでしまい、リリカルなのはの世界に転生した主人公。

戦闘機人と仮面ライダーバースの能力でミッドチルダを駆ける！
ただど女になるのは予想外だった…。

駄文です。

作者はリリカルなのはやバースの知識をwikiなどで知った程度です。ですから、変な所があるかも知れません。

それが気に入らない人は見ない方がいいです。
今後は原作を見ながら更新していきます。

第一話 女神と転生とリリカルなのは（前書き）

もう一度言いますが、作者はリリカルなのはに余り詳しくありません。

なので、設定などにおかしな所があるかも知れません。

第一話 女神と転生とリリカルなのは

突然だが「テンプレ」と言う言葉を知っているだろうか？

まあ、「お約束」と言い直せば何となく意味が分かるはずだ。

そして、若くしてがんで死んでしまったこの俺にも神様が現れ転生してくれるという「テンプレ」状態になったのだが…。

「まさか、その神様の部下のせいで死んでしまうとは…。」

「その事に関しては、本当に申し訳ないと何度も言っているではありませんか。」

そう言いながら、俺に向かって何度も頭を下げているこの美少女が神様、女神様であり、俺が死んだ原因を作った奴の上司に当たる存在らしい。

女神様によると、本来なら俺は重大なけがや病気にはならず、そのまま天寿を全うするはずだった。

神の世界にはあらゆる生物の寿命を管理する場所があつて、そこで一番偉いのがこの女神様らしい。

そして今回の事件を起こした部下がこれまた結構ドジな奴で、本来なら違う人間が死ぬ運命を間違えて俺が死ぬ運命に変えてしまい、女神様が気付いた時にはもう俺が死んだ後だった、と言う事だ。

「てか、その部下はどうしたんですか、こういう場合は本人が面と向かつて謝るべきでは？」

借りにも神様だし、これから転生して貰うのだからと、敬語で文句を言った。

「ただ今説教部屋で説教を受けてる最中でして…、当分…、いえ、三日以上はかかると思うので、変わりに、この私が、お詫びと転生を行う事になりました。」

三日も掛けて説教とは、天界のスケールは凄いな…。

「ではそろそろ転生の手続きを行いましょう。特別に好きな能力を身に付けて、転生する事ができます。」

「あ、その前に質問。俺以外にも転生して、異世界に行った人っているの？」

「まあ、少なからずいますね。理由も様々ですし。」

「やっぱりいるもんだな。」

「転生先で出会ったら、どうすっかな…。」

「ただ、転生者の中には、ろくでもない思想を持つ者もいます…。」

「その世界の本来進むべき運命を勝手に変えたりするんです。」

「それが善意ある行動だったら、多少はこちらも目を瞑ります。」

「しかし、ハーレムを作りたいからと言う個人的理由で改変されては…、この事は今天界でも重大な問題とされているんです。」

「女神様の気持ちも分かるな。」

「俺がいつも見ている携帯小説サイトの二次創作小説はそんなのばっかだからなあ。」

「とすると…。」

「俺は疑わないんですか？」

「俺だって今から転生するから、行き先の世界によつては運命に介入しようと思えるかも知れない。」

「失礼ながら、転生するに当たり、あなたの経歴をこちらで勝手に調べさせて貰いました。」

「その結果、私自身は、あなたなら大丈夫だと判断しました。」

「と言うより、こちら側のせいで死んでしまったあなたに対するせめてもの詫びです。」

「あなたがどんなことをしても私達は口出しをしないと決めました。まあ、度が過ぎた行いをした場合はこちらでも黙ってはいませんが…。」

「成る程、つまり見逃すから、今回の事は水に流してくれ、と言う事か。」

そこまでして貰うんだったら、もう許すしかないだろう。

「話がずれましたが、そろそろ転生の事を…。」

ハイハイ、確か能力は何が欲しいかだっけ。

と、重要な事を聞き忘れた。

「俺は何処に転生するんです？」

「ああ、転生先ですか？」

ちよつと待つて下さい。」

何処から取り出したのか、ノートパソコンを操作する女神様、てか天界にもパソコンが有るとは。

「私達神だつて地上の技術には興味が有ります。

こつやつて取り入れるのも、今の天界じゃあ、珍しく有りませんと…、出ましたよ。

転生先の世界の候補です。

一番人気なのは『東方Project』の世界ですね、その次が『リリカルなのは』の世界、最近じゃあ『とある魔術の禁書目録』の世界、『インフェニット・ストライク』の世界が人気ですね。」「なんかセレクトが片寄つてる気がするけど…、そうだな…よし。

「『リリカルなのは』の世界でお願いします。」

この世界にしたのにはもちろん理由があつて、

「それで、その世界では、俺を戦闘機人にしてほしいです。」

リリカルなのはが一番興味を引いたのが、戦闘機人だった。

俺はロボットとかサイボーグ物が結構好きで、なつてみたいなど思っていたりしていたが、こんな形で実現するとは夢にも思っていなかった。

「『リリカルなのは』の世界に行くのなら、デバイスとか用意します？」

デバイスか…、そう言えば、最近気になる仮面ライダーがいたな…よし、

「デバイスは仮面ライダーバースのバースドライバー型にしてください。」

バースは結構気に入ってるライダーだ。
オーズ本編は見たことがあまりないが、次々と武装を出して戦うのが漢心をくすぐる。

「それで、バースC L A W s以外にも、俺が考えた武装も出せるようにしてくれます?」

「いいですよ。」

そう言いながらぽんぽんとキーボードを打つ女神様。

「それから、新しい武装を作るための頭脳と技術力が欲しい。」

「了解しました…。」

以上でよろしいでしょうか?」

まあ、他に望む物はないかな…。

「もう大丈夫です。」

「分かりました。それでは、今からあなたの魂をリリカルなのはの世界へ送ります。」

すると、俺の周囲が光始める。

「私は先に現地に向かいます。」

そこでこれからの事についての説明をしますね。

では、また。」

そう言い残し、女神様は消えた。

そして、光に飲み込まれるように、俺 は意識を失った…。

この時、もう少し色々考えていれば、こんな事にはならなかったなど、今更後悔していた…。

第二話 目覚めと性転換と戦闘機人（1）（前書き）

今回から、性転換の要素が出てきます。
苦手な人は注意を。

第二話 目覚めと性転換と戦闘機人（1）

ゴボツ……、ゴポポ……。

ん……、ここは……、なんだ……？

あの後、俺は光に包まれて……。

転生は成功したのか……？

身体が何故か動かせない、俺は今、どういう状態なんだ……？

ゴポ……

ここは……、水の中か？

転生して水の中って事は……、もしかしてここは、お腹の中……？
いや、少し感覚が違う……。

ここがお腹の中なら、俺は丸まってるはずだが、そんな感覚はしない。

それならここは……？

そんな事を考えていると……。

『セカンドナンバーズアインツ、覚醒確認、起動準備に入ります』
何処からか音声が聞こえると、俺の周りにある水が引いていく……。
それと同時に、今まで動かせなかった身体に、神経が張り巡らしてる気がする。

そして、周りの水が全て下に引く頃、俺は要約目を開ける事が出来た。

最初に、目に飛び込んだのは、薄暗い部屋だった。

よく目を凝らすと、何やらパソコンやよく分からない機械類が沢山置かれているのが分かる。

「なんだ、このへ……！」

「部屋」と言いかけた時、俺は自分の声に凄い違和感を感じた。
……声が高い……！

まるで女声みたいだ。

それに、胸が重く感じる。

「胸…女……！？」

……物凄く嫌な予感がする。

もしかして、俺の身体は……。

いや、まだ決め付けるのは早い、だけど……よしっ！

覚悟を決めた俺は恐る恐る、目線を下に……俺自身の身体に向けた……。

……ぷるん、と表現するのに相応しい二つの山が、俺の胸にそびえ立っていた……。

そして、震えてる右手で、俺は自分の股間を触る……、いつも見慣れている『アレ』の感触が………無かった。

……、

……、

……よし！

「なぜだあああああ……！！！」

今までで一番長く、俺は叫んだ。女声で……。

其れから数分後、少し落ち着いた俺は、部屋の見回りをしていた。どうやら、先まで俺は生体ポットのような装置の中にいたらしい。「何か、鏡みたいなのってないか……。」

今の自分の姿をもう一度確認したいので、鏡を探していると、

「要約見つけました！良かった！」

あの女神様が現れた、そう言えば来るっ言ってたっけ……。

「私とした事が、リリカルなのは世界の、いつ頃でどこに転生するのか、うっかり調べ忘れてしまいました。

何とか必死で探したかいが……。」

「あの、女神様、話をしている所悪いんですけど……。」

それに反応したのか、女神様は俺の方へ向くと、繁々と俺の身体

を見回した。

「この姿って……。」

「ああ良かった。ちゃんと設定通りの身体に転生しましたね。」

……へっ？

「設定通りって……？」

「はい、あなたが望んだ通り『バースの能力を持った戦闘機人』の身体です。」

「いや……、そうじゃ無くて、なんで俺の性別が女になっているんですか！？」

「別に男にしてくれとも言ってますんよね？」

……何……だと……？

「もしかして転生するのに、性別とかも、設定しなきゃいけないとか……？」

「その通りです。」

転生する場合、性別や容姿、そして種族も転生者自らが決めなければいけません。

設定しなかった場合は、全てランダムで決まります。」

「そんな事聞いてませんけど……？」

「転生する前にちゃんと聞いておくべきでしたね。」

あれ、これって俺がいけないことになってるの……？

「所で、先程から何かを探していた用ですが、どうしました？」
そうだった。鏡を探していたんだっけ。

「いや、自分の姿を確認したくて鏡を探していたんですけど……、薄暗くて、よく見えないんですよ……。」

『でしたら、今から明かりをつけます。』

あと鏡でしたら、あなたの後ろにあります』

なんだ、今の音声……？

何処からか聞こえた声に気を取られていると、周りが明るくなっ

た。

本当に明かりが付いたようだ。

そして、後ろを向くと、本当に鏡が合った。

そこで要約、俺は今の自分の身体を見る事が出来た。

「……可愛い……」

鏡に移った自分の顔は、正に可愛かった。

見た目の年齢的には、子供と大人の中間ぐらいか、少女らしい幼さと、魅力的な大人の雰囲気、見事にバランスよく混ざり合っている。

髪の毛は鮮やかな緑色で、瞳は金色に輝いている。

両者共、顔をより美しく引き立てている。

次に体の方を見てみる。

裸ではなくスポーツブラとスパッツのような下着を着ているのが幸いだった。

身長は生前より少し縮んだみたいだ。

スタイルはとても理想的であり、出るべき所が出て、引くべき所が引っ込んでいる。

胸なんて結構でかい、これが巨乳と言う奴か…。

可愛くも美しい顔にスタイル抜群の身体、町中を歩けば男は必ず見とれるだろう。

「……女性としては、理想的な体格ですね。」

顔も文句なし、女の私ですら見惚れちゃいますよ。」

女神様の言うことも分かる、と言うより俺自身も、今の自分の姿に見とれていた。

第二話 目覚めと性転換と戦闘機人（2）（前書き）

内容が少しグダグダになっています。すみません。
後、後書きが：色々とすいません。

第二話 目覚めと性転換と戦闘機人（2）

魔法少女リリカルなのは Birth・day

前回までの三つの出来事

一つ、女神の部下のミスで死んだ主人公はリリカルなのはの世界に転生する。

二つ、転生した主人公は戦闘機人となる。

三つ、しかし、性別を設定し忘れた結果、性別が女になってしまう。

「そう言えば、ちょっと気になる事があつたんですけど。」

女の身体を暫し眺めた後、ふとある事を思い出した。

俺がこの世界で目覚めた時、最初に聞いたアナウンスに合った単語…、『セカンドナンバーズ』とは何だろう？

リリなの的に考えればやっぱり、あのジェイル・スカリエッティが製造した戦闘機人『ナンバーズ』に関係があるんだろうけど、『セカンド』とは一体…？

俺はこの身体を設定した女神様なら何か知っているのではと思いついてみた。

「『セカンドナンバーズ』…？

いいえ、知らないですね。

私もそこまで設定はしてませんが。」

「じゃあ一体…？」 『それは私が説明しましょう。』
むっ、またこの音声か…。

「その前にお前は誰だ！？」

何処にいる！？」

『私はここです。マスター。』

声が聞こえた方向を見ると机の上で何か光っている。

近づいてよく見ると…、

「……バースドライバー？」

右についているダイヤル、中央についたガチャガチャのカプセル…、正しくバースに変身するためのアイテムが置かれていた。

「お前か…？」

先から俺に色々と言っているのは。」

「その通りです。」

マスター。」

カプセルの中にある球体が光り、そこから音声が届く。

「何故俺をマスターと呼ぶ？」

「私は、セカンドナンバーズ《開発ナンバー1（アインツ）》…つまりあなたの補佐をするために製造されました。」

「つまり、デバイスのような物か？」

「はい。」

「じゃあ早速だが…、俺はこの世界に生まれたばかりだ。

今の状況や『セカンドナンバーズ』ても知らない。

それらの事を全て教えて欲しい。」

「最初はセカンドナンバーズについて話しましょう。あなたは自分がどんな存在か、把握していますか？」

「戦闘機人で……スカリエッティに製造された…？」

「その通りです。」

そしてあなたは、スカリエッティに製造された、次世代型の戦闘機人です。」

成る程、だからセカンド（次世代）なのか…。

にして、あの博士がこんな事していたとは…。

まあ、自分のクローンをナンバーズの腹に入れている位だしな…。
もしもの時のために製造して置いたのか？

「そのスカリエッツィは今何処に？」

『3年半前、当時のナンバーズと共に反乱を引き起こしましたが、『機動六課』を中心とした管理局部隊により鎮圧、スカリエッツィ他、ナンバーズも一人を除き、全員管理局に確保されました。恐らくは現在、拘置所に捕らえられていると思われます。』

じゃあ、今はStrikerS終了後か、まあこれで機動六課の皆さんと戦う理由が一応無くなったな、出来ればあんな化け物集団とは戦いたくないなあ…。

『話が逸れました、セカンドナンバーズは第一世代より機能を向上させる事を目的に、通常体よりも多く機械が移植されており、より強力なISを搭載し、発動できるよう設定されています。』

成る程、それが違いか…。

「俺のISで何か分かるか？」

『あなたのISは《バースclaws》。』

あなたの身体の各部に備えられた 《リセプタクルオーブ》と呼ばれるエネルギー中継システムを通して、武装を瞬時に呼び出し、装着が可能です。』

おお、正にバースの能力そのままだ。

『自分の身体の機能を確かめたいのなら、一度戦闘形態になられた方がいいでしょう。』

戦闘形態？変身のことか？

『私を腰に装着した後、『セットアップ』と唱えれば、戦闘形態に以降します。』

それじゃあ早速やってみますか。

「下着だけの体にゴツいベルトをつけてる美少女って、何かシュールですね。」

何他人事のような素振りをしてるんですか女神様…。

いまいちこの人（人か？）のキャラが判らないなあ。

神様ってのは俺達人間の考えでは判らない者なのかもな…。

まずはコイツを腰に……、そういやコイツの名前を聞いていなか

った。

「お前、名前はあるのか？」

『現段階では特にありません。あなたが稼働した時に名付け貰う予定でした。』

それじゃあ俺が名付け親になるわけか、そうだな……よし。

「ならば今からお前はバース、誕生の意味を込め『バース・デイ』と名乗れ。」

「個体名称、『バース・デイ』愛称『バース』、登録完了しました。」

それじゃあ改めて。

「バース・デイ、変身^{セフト・アップ}！！」

バースから出てくる光が服のような物に変化して、俺の身体を包んでいく。

それが終わると、今度はアーマーが出現し、身体各部に装着されていく。そして、光が収まると、俺は自分の姿を見るため、鏡を覗いた。

ナンバーズと同じボディースーツを着ているが、ナンバーズが着ていたスーツの色が青をベースにしたのに対し、俺のスーツは黒がベースになっている。

更に、装着しているアーマーも従来型と違い、バースの装甲に似た物になっている。

リセプタクルオーブの配置場所も同じだ。

見た目を簡単に表すと「バースの黒い部分が、ナンバーズスーツに変わっている」と言った感じが。『身体に異常とかはありませんか？』

「ん…大丈夫だ、これといった事はないな…。」

『では、次にISを試してみましよう。』

現段階では6つの装備を呼び出す事が出来ませんが、その内の一つを装備してみましよう。

右についているダイヤルを時計回りに回して下さい。』

「OK」

まあ、ここからはテレビで実際に見たから、大体は分かるけどな。キリリ…キリリ…パカッ！

ガチャガチャガチャ、『ドリルアーム』

右腕のリセプタクルオーブから部品が転送され、瞬時に組み立てられる。

数秒もしない内に、俺の右腕に、大きなドリルが装着された。

『ISも特に問題はないようですね。』

「そうだな。」

だけど、まだ試したい事が色々ある。

暫くはこれを使いこなすよう練習しないとな。」

とりあえずは、これが俺の当面の目標だな。

「そう言えば、あなたは自分の名前は考えてありますか？」

女神様に言われてハツとした。

そついや自分の名前を考えていなかった。

新しい名前か…、リリなのの世界だったら、別に前世の名前でも大丈夫だろうと思っていたが…、今の俺は女の身体だ、色々自然だろう。

ここは他のナンバーズに習って『アインツ』となるべきか…いやまてよ、『Vivid』には『アインハルト』がいるから、下手すれば愛称とかが被つちゃうかも知れない。

と、どうでもいい事を考えつつ、『アインツ』は『アインズ』に変えて名字にする事にした。

そして、どんな名前にするか悩む事数分…。

「決めました。」

俺の新たな名前はステラ、『ステラ・アインズ』と名乗ります。」

「分かりました。」

これで私が見るべき所は一応完了ですね。」

『いいお名前です、マスター。』

「ありがとうバース。」

「さて、あなたの名前も決まった事ですし、私はそろそろ天界に戻ります。」

「え、もう行ってしまうんですか？」

「こう見えても忙しい身なのですよ。」

部下の後始末もしなければいけないですし。」

そう言った後、女神様はほのかに光りながら、宙に浮いていく。

「俺は、この後どうすれば……？」

「それはあなたが決める事です。転生する前に言いましたよね。

天界はあなたが世界を変えたりしても、手を出さないと……。

ですから、あなたの思うがままに生きて下さい。

それに……、あなたには優秀そうなデバイスがついているではありませんか。

その子と一緒になら大丈夫ですよ。

では……。」

「待つてくれ、最後の女神様の名前を教えて欲しい。

なんやかんやで、あなたは恩人だから名前を覚えていたい。」

ここで、俺は前から気になっていた事を聞いてみた。

すると、女神様はにっこりと微笑みながら、質問に答えてくれた。

「私の名前は『ノア』です。

では、またいつか……。」

その言葉を最後に女神様……いや、ノアは消えた。

第二話 目覚めと性転換と戦闘機人(2) (後書き)

おまけ

「それにしても、本当にでかいなあ……俺の胸。」

大きく膨らんだ二つの胸を見ながらふと呟く。

「……それは私に対する嫌味的なものです？」

女神様のその言葉に、ふと女神様の胸をみると……、どちらかと言えば平坦に近い胸があった。

「いいですよー私は胸なんか気にしてませんからー(棒)」
「うわあ、気にしてる、あの反応はめっちゃ気にしてる」

「ま、まあ、別に胸を自慢したい訳じゃあないので……」
「そう言いながら自分の胸をさりげなく触ってみると……」

！……！

な、なんだ、この未知なる感触は……？

ム、ムムム、これは……癖になる感触だ。

女の胸つてのは皆こんななのか？

ふと前を見ると、女神様の……小さい胸が……。

「女神様の貧乳の胸はどんな感触なのかな……？」

「今ハッキリと私を貧乳と言いましたね！」

で、なんで近づいて来てるんですか！？

後、目がなんかいやらしいんですけ……ちょ、ちょっと……や、やめてくだ……アッ……！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5542u/>

魔法少女リリカルなのはBirth・day

2011年10月6日01時28分発行